

# 地藏尊の宗教

⑥

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

## 子供の守り神としての地藏菩薩

インド生まれの菩薩でありながら、地藏尊はもともと日本化した「ほとけさま」といっても過言ではない。前回は日本で成立した経典により、地藏尊と閻魔王とが一体と考えられるようになったことを述べたが、日本各地には経典の根拠のない、極めて多様な地藏尊信仰が見出せる。その多様性は日本独自の地藏尊の名字に表れている。広く知



高尾山麓の別院、不動院にも

られている「子育て地藏」「身代わり地藏」に留まらず、『綜合民俗語彙』（平凡社）には九十の地藏尊の名前が収録されており、民俗学者の石川純一郎は四百もの地藏名を集めて、それらを信仰様態によって十三種に分類している（『地藏の世界』時事通信社）。地藏像の身体に患部を触れると治癒するとされる「撫で地藏」も各地にあり（同書）、

様々な地藏名は、衆生の悩みの多様性を反映したものであり、その解決を地藏尊に求めたことにほかならない。

地藏尊がそうした役割を担えたのは、『地藏本願経』に「この地藏菩薩は六道の一切の衆生を教化し、発するところの誓願の劫数は千百億の恒河沙の如し」等とあり、地藏尊が衆生のあらゆる苦難を救うてくださると説かれていることに基づく。この思想は、日本で成立した簡潔な『延命地藏経』によりさらに広く大衆的に普及した。この経によれば「三界のあらゆる四生、五形変化せざるころなし」とあり、地藏菩薩は自然界のあらゆるもの、あらゆる生物等に身を変えて衆生を救うて下さるとされている。またこの経典には日本固有の天狗の名が見え、地藏菩薩の名を聞けば天狗も山神も水神や火神らも、みな悟りを開くと説かれている。

『延命地藏経』の名が

示す通り、この経典の主題は延命を始めとする地藏尊の十の現世利益的な福徳を示すことである。

これを地藏菩薩の十種福徳といひ、「一、女人泰産、二、身根具足、三、衆病悉除、四、壽命長遠、五、聰明智慧、六、財寶盈溢、七、衆人愛敬、八、穀米成熟、九、神明加護、十、證大菩提」と記されている。すなわち、女性の安産、身体の健康、病気が治る、寿命が延びる、聡明になる、財産が増える、人々に愛される、農業が栄える、神々に守られる、悟りを得るの十種である。さらに八八怖、すなわち八つの恐怖がなくなるとし、風雨の災害を免れ、外国が侵略せず、国内で叛乱が起きず、人々が病気にならないなどが挙げられている。しかも、仮にそうした苦しみが生じたとしても、地藏尊は衆生に代わってその苦しみを受けてくださると説かれている。このことを「代受苦」といい、「身代わり地藏」

の根拠のひとつとなった。第一回に触れた、京都の矢田寺のご本尊もその一例である。

これらの地藏経典には明記されていないが、日本で地藏尊は幼子の救済に最も力を発揮してきた。人々は、子供が生きていれば安産と子育て、水子や早世であれば幼児の死後の安寧を祈願して地藏尊に手を合わせた。各寺院の古い過去帳を繰れば、一目瞭然のように、近代の医療が確立する以前、乳幼児の死亡率はきわめて高かった。こうした時代背景のもと、江戸時代になると、あの世とこの世のあいだの賽の河原で悲しみ苦しむ幼子を地藏尊が救う信仰が盛んになり、その様子を歌った各種の『地藏和讃』が作られた（真鍋廣濟『地藏菩薩の研究』三密堂）。これにより日本では安産地藏・子安地藏など、子供に縁の深い地藏信仰が盛んになっていく（同）。例えば、京都・實修派の『地藏和讃』

# 桜を愛でる

シンソング歌手 友納あけみ

春一番が吹きました。寒かった今年の冬：ずつと向こうに春の兆しのちいさな光が見えたようで、何処かほっとします。町を歩く人の表情も明るく、肩の力も抜けて、長閑に見えます。春風が吹くだけで、皆こんなにも穏やかな気分になれる：やっぱり自然の力は凄いですね。

窓を開けても丸まったまま、一瞥しただけで動かなかった我が家の猫のアムールも、日溜りに飛び出して行って、ペランダの格子越しに外を眺めています。

雪国生まれの人は雪解けの水の、小さな流れを見つけると、本当に嬉しそうです。都会育ちの私は厳しい冬を経験していないだけ、そんな感動を味わうことが出来なく：そういう話を伺いま



すと、羨ましくさえ思います。もうすぐ春が来たら、こんな温かさは当たり前に感じてしまうのかな：考えてみますと、与えられている恵みの全て、太陽も水も空気も、元気に朝を迎えられることも、美味しく食べられることも、愛し合っていたわり合えることも、歌えることも：何一つとして当たり前の事ではなく、奇跡的に許されている事なんですすよね：改めて本当に感謝です。

あの丸裸の桜の木が柔らかな桃色の花で一杯になるなんて、奇跡的なこと：季節がちやんと巡ってくれて、春が来て、桜を愛でることが出来：

考えれば考えるほど本当に全てに感謝です：やっぱり自然って凄い。

私には後、何回くらい春が、桜が許されているのかなあ？この頃、ふと思えます。そう思えば、思うほど春を迎える愛おしさは増していきます！この醍醐味は若い人にはわからない：今年は何んとっても桜を満喫しないど…

この春は、桜の花を愛で、たくさんエネルギーをもらって、過ごしゆきます。

は七五調で唱えやすく、子供の心ならず、残された親にとっても救いとなる言葉に満ちた、涙を誘う名品である。

和讃は「**命頂礼地藏尊**」之は此世の事ならず死出の山路の裾野なるさいの河原の物語

「**命頂礼地藏尊**」之は此世の事ならず死出の山路の裾野なるさいの河原の物語。聞くに付ても哀なり」で始まる。親に先立つ不孝を背負った嬰兒は、賽の河原で風雪の「苦患」を受けつつ、「唯父戀し母戀し」と思いながら「二重積んでは父のため二重積んでは母さまと」河原の小石を積み上げるが、地獄の鬼が来て崩してしまう。嬰兒が生前がままで泣いたことはすでに地獄に響いており、残された親の嘆きも河原に響いて嬰兒を感わす。泣き歩いて石まくらに寝入ってしまったと、やがて地藏尊がやってくる。

「あつめぐみの御波 袈裟や衣にしたつ 救け給ふ有難や 大慈大悲の深きこと 地藏菩薩に如けき」と説いて、この『地藏和讃』は幕を閉じる。こうした信仰をもとに、木彫や塑像に比べ簡単に造り出される石地藏が全国に作られたのみならず、江戸時代には真言僧が厨子に地藏尊を入れて各地を歩き、「薄幸な母たちに拜ませた」ことがシーボルトのお抱え絵師によって描かれている（小林淳一『江戸時代人物画帳』朝日新聞出版）。現代でも人々が地藏像を担いで家々を回り、子供の健康を祈願する風習は、「回り地藏」の風習として各地に伝わる。まさに、子供の守り神としての地藏尊、異界との境界における地藏尊という、日本的地藏尊信仰の確立である。後者については次回述べることにする。